

わたしは嘘をついている。

「なのは」

「なのは」

「なのは」

「なのは」

家族に。

「なのは」

「なのはちゃん」

友人に。

「なのは」

「なのは」

「なのはちゃん」

仲間に。

「……なのは」

でも。だけど。

ただ一人だけ、嘘をつき通せない人がいる。

「なのは」

その声は、心が蕩けてしまいそうなほどにやさしくて。

「なのは、なのは」

「ん……」

半ば夢うつつだった意識の中、わたしはようやく自分の名前を呼ばれていることに気がついて目を開けた。

「ん、あれ、フェイト、ちゃん？」

「なのは、大丈夫？」

「……え？」

その問いかけの意味がわからず、なにかあったのかな、と片肘をついて身体を起こす。

物心がつく前から、おそらくはわたしにとって最も見慣れた景色。

自分の部屋のベッドの中。窓から差し込むかすかな灯りを頼りに辺りを見渡してみたものの、特に変わったことはないように思えた。

「大丈夫、って？」

「なのは、泣いてたから」

そう言って、フェイトちゃんは指先でわたしの目元に

そつと触れた。

目尻に、たしかにかすかな違和感がある。

「え、あれ、わたし、泣いてた?」

自分でも気付かないうちに零れていたらしい涙の粒を手のひらで拭って、わたしはフェイトちゃんに笑いかけた。

「にははは、ごめんね。うん、大丈夫だから」

「なのは、どうしたの、なにかあった?」

フェイトちゃんの問いかけに、わたしは一瞬言葉に詰まる。

自分でも、なぜ涙なんて流していたのかわからない。

でも、それを言ったらきつとフェイトちゃんは心配すると思う。

「えつと、あのね、ちょっと怖い夢を見たの」

だから、わたしは嘘をついた。

「怖い夢?」

「あんまり、はつきりとは覚えてないんだけどね」

「夢、か」

フェイトちゃんがわたしを見つめる。

「それなら」

フェイトちゃんが手を伸ばしてわたしの肩の辺りをつかむ。

「え、フェ、フェイトちゃん?」

そのまま引き込まれるようにして、わたしの身体はフェ

イトちゃんの腕の中に抱き寄せられた。

「もしまた、怖い夢を見たら」

耳元で囁かれるフェイトちゃんの声は、やっぱり甘くて、やわらかくて。

「夢の中でも、私を呼んで。私が、きつとなのはを助けるから」

「フェイトちゃん……」

うん、と小さくうなずいて、わたしはフェイトちゃんの胸に顔をうずめた。

フェイトちゃんの匂いにする。

フェイトちゃんの声と同じ、甘くて柔らかくて、やさしい匂い。

「おやすみ、なのは」

「おやすみなさい、フェイトちゃん」

フェイトちゃんの鼓動に、自分の鼓動を合わせる。

できることなら、このままフェイトちゃんの中に溶けてしまいたい。

フェイトちゃんと、一つになりたい。

そんな叶うことのない願いを心の底にしまって、わたしはまぶたを閉じた。

そのまま微睡みの淵へと落ちていく意識のなかで、フェイトちゃんの心臓の音だけが、最後まで耳の奥に響いていた。